

『魔の山』の市民 ——その可能性と限界——

島田 了

要 旨

創作上の転機を迎えていたトーマス・マンは、『魔の山』で個人的な世界から社会的な世界への道を踏み出そうとしていた。それはそれまでの彼の作品の中心にあった北ドイツの市民の世界を離れ、多様なヨーロッパの全体を捉えようという試みでもあった。物語の舞台であるサナトリウム・ベルクホーフは、人工的に作られたヨーロッパの精神生活の縮図として描かれている。

主人公ハンス・カストルプは故郷のハンブルクを離れて、高原のサナトリウムで精神的冒険を重ねて、新しいヒューマニズムを予感することになる。しかしこの精神的な昇華は、観念的世界のなかではじめて可能となったものであった。

その一方でこの作品においては、個人的なもの、現実的なものが後退している。理念としての市民を求める過程で、それまでのトーマス・マンの作品世界を支えていた現実の市民の姿が希薄になってしまっている。そこでは市民のもつ多くの積極的な特徴が失われてしまっているのである。

トーマス・マンが『魔の山』で示した新しいヒューマニズムは、その精神的な価値において新たな高みを獲得したが、その一方で『ブッデンブローク家の人々』にくらべて生活に根ざした現実感覚という点で後退を示し、現実との関わりという点でその限界を明らかにしていたのである。

キーワード： 市民，共同体，自伝的要素，職業，観念性，脱市民化

- I. トーマス・マンの転機、『魔の山』の問題点
- II. 市民の変容、『ブッデンブローク家の人々』から『魔の山』へ
- III. 『魔の山』，その可能性と限界

I. トーマス・マンの転機、『魔の山』の問題点

1901年に発表した『ブッデンブローク家の人々』の画期的な成功のあと、彼が本格的な長編小説に復帰するのは、1924年の『魔の山』を待たねばならなかった²。こうして発表されたこの長編小説は、第一次世界大戦後のいまだ混乱の残る社会状況の中で、刊行後ほどなく最初の数千部が売りきれるといように予想外の好評を博した³。しかしトーマス・マン自身が「7年ではなく12年ものあいだ、何かにつけて私を呪縛していた」⁴と述べているように、完成に至るまでの道のりは決して平坦なものではなかった。

『ヴェニスに死す』完成の翌年1913年に執筆が開始されているが、当時彼は創作にひとつの区切りが打たれたと考え、新しい可能性を模索している時だった。

『ブッデンブローク家の人々』以来私の創作が徴候を示してきた問題が、『ヴェニスに死す』とともに実際に完全な構成を見たわけです、これは破局に終わろうとしている市民時代の個人主義的な全問題性の完全な構成ならびに終結に全く合致します。『ヴェニスに死す』に達した個人的な道では、もうそれ以上二進も三進もできませんでした。⁵

執筆開始後まもない11月には、彼は兄ハインリヒに当てた手紙の中で、「私の役割はもう終わってしまったと思います。おそらく作家になど決してなるべきではなかったのでしょう。『ブッデンブローク家の人々』は市民小説で20世紀にはもう意味がないでしょう。『トーニオ・クレーガー』はただ涙っぽいだけで、『大公殿下』は空っぽで、『ヴェニスに死す』はにせもので、その教養は中途半端なものです」⁶とさえ述べているほどだった。

トーマス・マンは、この時期に創作上の重大な転機をむかえ、「個人的な苦悩の世界から脱して、新しい社会的な人間的な道德性の世界へと出て行く道」⁷を『魔の山』で試みることになるのである。

したがって『魔の山』は、それまでの彼の作品とは大きく異なったものとなっている。まずそれまでの作品に比べて明らかに自伝的要素が少なくなっていて、この作品で「個人的な」ものから離れていこうとする意図が見られる。そのために彼が準備した膨大な量の

『魔の山』の市民

覚書は、もはやいままでのように自分の生の領域からだけでは新たな創作は不可能であるという認識から集められたものであった⁸。

作品の全体的な基本構想についてトーマス・マンは、1915年8月3日のパウル・アマンあての手紙で次のように述べている。

それは教育的・政治的な根本意図を持った物語で、主人公である若い男は、誘惑的な力としての死との対決という課題を背負わされ、人道主義とロマン主義・進歩と反動・健康と病気などといういくつかの精神的対極のあいだを滑稽と戦慄のまじったやり方で、——ただし決定的な形でというよりはむしろ、方向を探ったり知識を増やすためという形で、——案内されることになっています。(… [省略筆者]) 最後の解決は——戦争の勃発にするほか手はないと考えています。⁹

しかし第一次世界大戦をきっかけとした「二年以上にわたり武器をとっての思想勤務」¹⁰と彼が呼んだ『非政治的人間の考察』による中断はこの作品の性格を大きく変えることとなった。とくに作品の後半からは、その観念性がいっそう強まり、壮大な思想の対話がくりひろげられるという独特の形式をとっている¹¹。この作品は当初の意図を超えて『教養小説』を再興しようとするひとつの試み¹²であると同時に、「ドイツ教養小説の歴史をパロディーの中で終えようとする」¹³作品でもある大胆なものへと姿を変えていくことにもなったのである。

「20世紀も30年頃までのヨーロッパ人の魂の状態の、そして精神的問題点の記録」¹⁴であるこの作品の舞台は、スイスのダヴォスにある高原サナトリウム、ベルクホーフである。ベルクホーフにはさまざまな国々から人々が集まってきていて、まさにヨーロッパの精神生活の縮図として描かれている。サナトリウムの描写は写実的におこなわれてはいるものの、全体的には「無時間性と義務を忘れた反市民的世界」¹⁵として描かれている。

彼らは入院患者であるため職業に従事しているのではなく、その家族、親戚もあらわることがほとんどないため、「生活の現実から遊離したところに生ずる不毛な抽象性に支配され」¹⁶ている。この希薄な現実性ゆえにこの作品の観念的な性格が強く印象づけられているのである。そしてこの密封されたレトルト的世界は、「平地」の世界、つまり市民的価値観に支えられた活動の世界と幾重にも対比されることによって¹⁷、精神的な冒険が可能となる錬金術的世界として成立しているである。

ハンス・カストルプの物語は昇華の物語なのである。単純な主人公が、『魔の山』の熱っぽい錬金術を受けて、以前は夢想だにしなかったところの、道徳的な、精神的な、また官

能的な、さまざまな冒険をさえもできるようになるのである。¹⁸

ハンブルクの市民ハンス・カストルプは、休暇をかねて入院している従兄弟ヨーアヒム・ツィームセンを見舞うために、故郷を遠く離れてこの観念的錬金術の世界を訪れる。彼はベルクホーフの数々の反市民的な習慣に対して、市民の立場から幾度となく批判と疑問を投げかけることになる。しかし彼は診察の結果入院患者としてベルクホーフでの滞在を始めることになり、彼の精神的な冒険の物語が始まるのである。この変化の中で彼はベルクホーフに実に素早い同化を成し遂げていることから分かるように、実は彼の中にもひそかに反市民的な傾向が眠っていたのであった。

つまり、ハンス・カストルプの「市民性」も問題をはらんでいたのである。ベルクホーフの観念的世界の問題点に関する指摘は多いが、ハンス・カストルプの市民性が問題にされることはなかった。しかしこのハンス・カストルプの市民性の問題点とそれゆえの限界こそが、彼が『魔の山』で手に入れた新しいヒューマニズムの限界でもあったのである。この論ではその点を具体的に検討して行きたい。

II. 市民の変容、『ブッデンブローク家の人々』から『魔の山』まで

主人公ハンス・カストルプは、ハンザ都市ハンブルクの「りっぱな伝統をもつ名門の旧家の生まれであった」¹⁹。しかし、彼は幼くして両親を相次いで失い、そのため「彼の生家については、淡い記憶をのこしているだけだった。両親のどちらもほとんどよく知らないでしまった」²⁰とあるように、そもそも彼は両親とその家についての記憶をほとんど持っていない。この点で彼は「名門の旧家の生まれ」であっても、その伝統を直接継承してはいない。その代わりにハンスに強い印象を残したのは市参事会員である祖父ローレンツ・カストルプだった。祖父との生活はわずか1年半であったが、それでも「祖父の姿が両親の姿よりもずっとふかくはっきりと大きく心にきざみつけられていた」²¹という。

ただしその祖父の姿は、ハンス・カストルプにはかなり特異な方法でうつっていた。「等身大の油絵にかかれていた祖父の姿が祖父のほんとうの姿であった」というように、祖父は肉体を持たない観念的な精神的な人物として、「市参事会員の制服」である「法官服のような長い黒い上着を着た」肖像画の中の人物として描かれている²²。

祖父のその絵画的な姿を祖父の本当の正しい姿と感じ、日常の祖父はいわばかりの姿の祖父、間にあわせに不完全にこの世へしばらく適合させられた祖父であるようにかんじられた。²³

『魔の山』の市民

この祖父の肖像画はその中に、「あらゆる先祖が重なって見える」とあるように、一人の個人を越えた「超時代的な厳格な形式を体現している」²⁴ものである。

両親とその家に関する記憶を持たないハンス・カストルプは、この祖父の肖像画によってのみハンザ都市ハンブルクの市民の伝統につながるができるのである。ハンス・カストルプにとって、自分が市民であること、そしてその伝統に連なるものであることは、直接体験することはできず、もはや観念的にしか捉えられないものとなっている。

これはかつての『ブッデンブローク家の人々』の世界と比べて大きな違いとなっている。トーマス・ブッデンブロークにとって市民の伝統とは、なによりも祖父や父の商人としての具体的な活動によって支えられるものであり、その取引は自宅と兼用の仕事場でおこなわれていた。職業活動は実際の日常生活の一部であり、彼はそれに日常的に親しんでいた。彼は16歳で父の商会にはいるが、そこで働く人たちとも「ほんとうはずっと以前からもう親しかった」²⁵とあるように強く結びついていて、堅信式の日には「祖父が生前から約束してくれた金の長い時計鎖」を首にかけ、鎖には一族の伝統を象徴する「ブッデンブローク家の紋章のついたメダルが下げられていた」²⁶のである。

トーマス・ブッデンブロークもハンス・カストルプもともにハンザ都市の市民として描かれているが、二人は明らかに異なった立場に立っているのである²⁷。

『ブッデンブローク家の人々』の世界からの変化をもっともよくあらわしているのが、食事の場面の描写である。『ブッデンブローク家の人々』で描かれている「風景の間」でおこなわれる会食は、「木曜日には、定期的に一週間おきに家族が集まる」²⁸のものであり、儀式的な性格を強く帯びている。またそこには家族の他に取引のある商人仲間や牧師など他の人々も呼ばれている。そこでは会話が重要な役割を果し、その話題は取り引きに関する話から政治にいたるまで幅広いものであり、半ば公的な機能を併せ持ったものである²⁹。

それに対し『魔の山』で描かれているハンス・カストルプの祖父の家での食事の場面は次のようなものである。

二階はもっぱら客間であったが、ほかに漆喰でかざられた天井の明るい食堂があって、この食堂の三つの窓は裏庭に面しており、ぶどう色のカーテンがかけられていた。祖父と孫とはこの食堂で一八ヶ月のあいだ、毎日四時に、フィーテ老人に給仕されて、二人だけで昼食をした。³⁰

ここには『ブッデンブローク家の人々』で描かれているような市民たちの共同体はもう存在していない。ハンスはその両親を早くに亡くし家族すらも十分に備わってはいず、そ

の豪華な食卓の席に着くのはただ彼と祖父の二人だけである。食事のあと部屋をかえて別室で喫煙をするのは、本来ご婦人たちの前で強いたばことお酒をのむのを避けるためのものだが、二人きりにもかかわらず、祖父はきちんと小部屋に行ってたばこを吸っている。食事のマナーが、その形式性を優先した形であらわれている。

両親を亡くし、そしてまた祖父も亡くした、いわば「二重のみなしご」となったハンス・カストルプは、次に叔父であるティーナッペル領事のもとで暮らすことになる。彼は、ハンス・カストルプの後見人であり、財産の管理をしながら「肉親の情は別にして、三ヶ月ごとのはじめにそのときどきの利子の二パーセントの手数料を差引いた」³¹ 堅実な商人として紹介されている。この点で彼は、ハノーの後見人でブッデンブローク家の遺産管理をしながら「全収入の二パーセントを、手数料として几帳面に懐に入れていた」³² キステンメーカーと同じ種類の人間として描かれている。この叔父のもとでの生活は、祖父のときとは違い肉体を具えた現実的な商人の生活である。

ティーナッペル領事家での食事は「洗練をつくした」ものであった。このような贅沢な食事は、彼が身につけている「最上等のイギリス生地 of 服」などと同様に、社会的地位と富を保証するもので、商人仲間のあいだで「信用をつないでおくため」³³ に必要なものであった。

そして「純粋なハンブルク子であった」ハンス・カストルプも「ぜい美な生活を愛していただけではなく、(… [省略筆者]), 人生のなまの享楽に、赤ん坊が母親の乳房にしがみつくようにしがみついていた」ようにこの環境になじんでいた。「商業をなりわいとする自由都市の支配的上流階級が、その子弟たちに伝える高度の文明を、ハンス・カストルプはのんびりとなかなかぴったりと身につけていた」のである³⁴。

本来これらの快適な生活は、勤勉な労働の結果として認められるものであった。しかしここでは快適に暮らすことに重点がおかれていて、労働は単にそのための資本を稼ぐための手段としてみられている。ティーナッペル領事はブドウ酒商人であると紹介されているが、その取引の様子などの具体的な記述が一切ないのはそのことを証明している。さらに彼がハンス・カストルプにむかって言った次のような発言もそのことを裏付けるものである。

「しかしこの節は利子だけで生活するのは、たいへんなことだからね。君の五倍ぐらい持っていないかぎりね。君がこの町でものの数に入れられ、これまでの暮らしをつづけようというんだったら、いま持っているものの上に、みっちり稼ぎためなくちゃね。」³⁵

『ブッデンブローク家の人々』のような商人である市民たちの共同体が見られないだけで

『魔の山』の市民

なく、労働の意義が変わってきているのである。

そのような環境で育ってきたハンス・カストルプは、はじめはベルクホーフに滞在する人びとの振る舞いに対して彼のもつ市民的価値観から嫌悪感を示し距離を持っていた。しかしベルクホーフに入院・滞在するようになると、彼の立場は急速に変化していくことになる。

人文主義者であり、ハンス・カストルプの教育係を自認するセテムブリーニは、入院を切り上げて早く帰るようにすすめるが、それに対して彼は「家族といっても、三人の叔父だけなんです、大叔父とその息子が二人、そして、この二人の叔父もぼくとはむしろ従兄弟のようなものなんです。ほかには家の者というのはいないんです。僕は小さいころ両親に死なれたものですから」³⁶と説明している。家族を持たないハンス・カストルプは、「理想的な家族像によって特徴付けられる」³⁷ 市民的な生活様式にはなじまない。彼はこの頃から市民たちの世界であり、「家族関係によって秩序付けられた世界」³⁸ でもある平地との関係が実は希薄であることを自覚し始めているのである。

彼はまたみずからの状況を、「僕は百万長者ではありませんが、僕の持ちものは確実な投資をしてあって、僕は誰の世話にもならずすみすし、暮らしに不自由はありません」³⁹と述べ、自分が市民としての生活を維持することができるのだと主張している。

しかし、これはかつての『ブッデンブローク家の人々』で描かれていた活動する商人であるという市民たちの姿からは遥かに遠ざかった存在なのである。彼らはなるほど利にはさといが、家業に精を出すのを本分としている。トーマスの妹トーニーの再婚相手であるミュンヘンのホップ商人ベルマネーダーは、「妻の持参金を受け取ると、仕事からあっさりと退いてしまうような男」であり、善良ではあっても「名誉も、努力も、目標もない男」⁴⁰として激しい批判の対象とされているのである。

さらに「人生のなまの享樂に、赤ん坊が母親の乳房にしがみつくとようにしがみついで、とくにこの点で彼は純粋なハンブルク子であった」⁴¹ はずのハンス・カストルプは、平地にいたのでは決して自覚されることのなかった、かの地の市民社会に対する批判を告白するようになる。

「あそこの人間であるこの僕にさえも、いまから考えてみますと、たびたび粗野に感じられたんですから。僕は個人的にはそのつらさを経験しませんが。午後の客よびに最上の高価なブドウ酒をふるまえない家とはだれももうつきあおうとはしませんし、その家の娘さんは嫁にもらいてがないんです。そういう人たちなんです。僕はここにこうして寝て、遠くからそれをながめていると、それが粗野に感じられるんです。」⁴²

[下線部筆者]

ここでみられる批判は、もうすでに彼が、ベルクホーフに滞在する人々と同じ立場で語っていることを明らかにしている。そしてこの批判には、労働の観点が抜け落ちてしまっている。セテムブリーニはこれをとがめて、「人生の残忍性をとがめることに慣れてしまうと、人生から、生まれついた生活様式から、離脱しがちだからです」⁴³と彼の今後について予言するかのように忠告している。

ハンス・カストルプにとって市民としての生活様式は一定の財産でもって保証されるものだった、しかしその財産の前提となる勤勉なる労働はもはや問題にされていない。たしかに19世紀において市民というものは、階級でも身分でもなく、その文化や生活によって定義付けられるものとなっていた⁴⁴。しかし文化や生活様式は、勤勉な労働と緊密に結びついているはずのものであり、その本来よって立つべき基盤を失うことによって、外的な形式的なものに墮してしまう危険があった。

「いやしくも規則とか制度とかいう名前のつくものは、どんなものにも敬意を示さずにはいられなかったハンス・カストルプは、『ベルクホーフ』のその精神にも敬意を払っていた」⁴⁵とあるように、本来こうした墮落から身を守るべき道徳が、その形式主義ゆえに彼を容易にベルクホーフの価値観になじませてしまうことになる。

ハンス・カストルプの市民的道徳は自立的なものではなく、軍隊的規律による自制心をもちあわせたヨーアヒムがいなくなれば、彼はその行動を自制することができない。彼はショーシャ婦人への愛におぼれ、彼女のベルクホーフへの帰還をむなしく待ちつづけ時間を空費している。そんな彼に向かってセテムブリーニは「あなたがここで時間を浪費していいらっしゃるのが、どんなにぞっとするおそろしいことか、あなたはおわかりになりませんか」⁴⁶と述べ、時間を大切にすることが西欧の文明だと主張している。

ハンス・カストルプは、時間を浪費することによって、節約やたゆまざる勤勉といった市民社会の規範から離れてしまっていることを明らかにしている。彼は、ここに滞在する人々と豪華な食卓を囲むことになるが、その食事は完全にその社会的な機能を失っているものである。サナトリウムの人々は、さまざまな国、さまざまな階層の出身である、なるほどサナトリウムの入院患者でかつ滞在に必要な高額な費用をまかなうことができるという点では共通しているが、それ以外には何の共通点もなく、ブッデンブローク家の「風景の間」に集う人々とは異なっている。したがって「ここでは同じテーブルの人たちのほかに知りあいをつくることはなかなか容易でない」⁴⁷とヨーアヒムのいうように、有意義な人間関係を作るのはとても難しいものとなっている。滞在を続けるうちに、ハンス・カストルプは平地とのつながりを完全に失ってしまい、ベルクホーフでも限られた人たちと表面

『魔の山』の市民

的にしかつながってはいない。ここに滞在する人々は、生活する空間を共有しているだけである。病気の治療さえ共通の目的とはなり得ないのである。

彼の故郷は、いまや「古い世界、遠くへ沈んでしまった世界」⁴⁸となってしまった。叔父のジェームズ・ティーナッベルが、ヨーアヒムの報告を受けハンスを連れ出しに来るが、それも無駄であった。

はじめてベルクホーフを訪れた時に帽子をかぶらないことに抵抗を示していたハンス・カストルプは、いまや完全に同化してしまっていて、「ハンス・カストルプは真っ赤に日やけた顔で、帽子もかぶらず、外套もつけずにプラットホームのふちに立って」⁴⁹、叔父を待っていた。寒さを訴える叔父に対して、彼は「ぼくたちは寒くないですよ」⁵⁰と答えているが、「ぼくたち」とは明らかにベルクホーフの住民たちのことである。

会話の中でも「ハンス・カストルプは故郷の親戚のことも知人のこともたずねなかった」し、「故郷の話は、個人的な家庭的な話も、町の話も、商売の話も、造船、機械製造、ボイラー製作のトゥンダー・アンド・ヴィルムス会社の話も、まったく話題にされなかった」⁵¹とあるように彼の心は今やまったく平地を離れてしまっている。

そしてこの実社会にしっかりと根を下ろした人物として「優雅であるが、冷静で実際的な実業家」⁵²として紹介されているジェームズ・ティーナッベル叔父だが、父親同様彼が実際に仕事をしている記述は作品のなかに描かれてはいない。彼もその市民としての基盤の弱さを否定できない、したがって彼自身ベルクホーフの危険性から無事ではいられないと感じ取り、ハンス・カストルプを後にして早々に立ち去ってしまうのである。

ハンス・カストルプを連れ戻そうというジェームズ叔父の試みは失敗に終わるが、この失敗は「平地の人たちにとっては、肩をすくめて永久に匙を投げてしまうことを意味していた」、しかしその一方で「ハンス・カストルプにとっては完全に自由になったことを意味していた」⁵³。

このいささかいかわしい「自由」の中で、ハンス・カストルプの精神的冒険は本格化することになる。その頂点が「雪」の章である。人文主義者セテムブリーニとその論敵ナフタとの論争を経験した後、彼は雪の中で夢を見る。その夢のなかで彼は、理想的世界のひとつとして牧歌的な情景を見る。それは「銀色のきらめきに満ちた深い紺青の南の海、輝かしい美しさの入江」で「太陽と海の子ら、見るも美しい聡明な若者たちが、ここにもかしこにも動きまわったり、休息していた」⁵⁴のものであった。

『ブッデンブローク家の人々』では人々の集まる風景の間に壁掛けとして掛けられていた「一八世紀の趣味である牧歌的風景」⁵⁵が、そこに集まる市民たちの理想的世界を象徴していた⁵⁶。『魔の山』では、このような情景はハンス・カストルプがみる「無名で共同の」⁵⁷夢の形でしかあらわれえない。理想を担うのが実際の共同体から観念としての共同体になっ

ているのである。続けて彼は、「嬰兒を引きさく」⁵⁸ 二人の老婆の姿を見て、生と死の、冒険と理性の「中間こそが人間の位置である」という思想を手に入れ、「人間は対立する考えの主人で、すべての考えは人間によって存在するのであるから、人間はどんな考え方よりも高貴である」という結論に到達している⁵⁹。

しかし彼の精神的冒険によって得た結論は「非常な幸福を感じながら、魂で把握する理念」⁶⁰ であり、すべて観念の世界の出来事ではない。「平地とのつながりはもうすっかりなくなってしまった」⁶¹ ハンス・カストルプが繰り返す精神的冒険は、思弁的で現実に対して何ら働きかける力をもち得ないのである。彼がショーシャ夫人に語る「生にいたる道は二つあって、そのひとつは普通の真直ぐな大通りであり、もう一つは裏道、死を通りぬける道であって、これこそ天才的な道なのだ」⁶² という認識も、雪の章で得た認識とともに、いまだ共同体に奉仕することのない彼一人のものであり、現実に関わりかける力のない観念的なものでしかない。それゆえに彼は、依然としてベルクホーフにとどまりつづけなければならないのである。この状況は、彼が「菩提樹の歌」に親しんだ後も大きくは変わらない。

「読者は、私たちの単純な主人公ハンス・カストルプが、密封的教育的な錬金術によって何年ものあいだ錬金され、現在では精神的世界にふかく入り込み、彼の愛の『意義』と、その愛の対象の『意義』を十分に意識していたことを信じるだろうか？」という切実な問にたいして語り手はみずから、「私たちは、彼がそれを意識していたことを断言し、それをここに物語るのである」⁶³ と述べている。しかし意識はしていても、彼には働きかける共同体がない。

物語が最語を迎えようとするときティーナッベル老領事の死が伝えられても、彼の身辺にいっこうに変化が見られない。むしろ平地とのつながりが完全に消滅することにより、「ハンス・カストルプがいみじくも自由と呼んでいた現在の境遇を完全なものにする出来事であった」⁶⁴。

『魔の山』のプロセスは、別の意味では、ハンスの脱市民化のプロセスでもあった。そうした脱市民化のプロセスを完全に象徴するものが、「ある日サイド・テーブルの上から落ちて、(… [省略筆者]) それきりずっと動かなくなったまま」⁶⁵ の懐中時計である。勤労を重んずる市民にとって貴重な時間を計る時計の機能の消失は、時間に対する意識の決定的な変化を意味している。勤労に基づく市民という概念が根本から変化してしまっているのである。

このような脱市民化のプロセスは、なるほどハンス・カストルプの錬金術的な魂の冒険にとっては必要だったのだろう、いやこのプロセスなしには不可能だった。

『魔の山』の市民

つまり、「自由」のためという理由からであった。べつのいい方をすれば、海への散歩、十年一日のような現在と永遠のためであり、人生から離脱した彼が準備体状を示した錬金術的魔術のためであった。この魔術は、彼の魂の冒険の中核をなし、単純な実験材料であるハンス・カストルプの錬金術的冒険はすべてそのなかでおこなわれたのである。⁶⁶

しかしその一方でハンス・カストルプの魂の冒険のために必要だった錬金術的装置としての「魔の山」は次のような問題を抱え込んでいた。

現実界の精神的映像については「陣取り」でいろいろと瞑想するところのあった生徒も、現実界そのものについては注意を向けようとはしなかった。これは映像を真実と考え、真実を映像とのみ考えたがる驕慢な傾向のためであった。⁶⁷

この作品でハンス・カストルプは、「平地」から自由となり精神的な成長を遂げた。いま彼に必要なのもうひとつの自由であり、「罪深い魔の山」⁶⁸の魔術から解放されることであった。しかし彼自身の力ではなし得ず、戦争の勃発という外部からの力によって成し遂げられることになる。

いま彼は「罪深い魔の山」からの帰還を決意する。しかしここで彼が赴くのは、故郷ハンブルクの市民たちの世界でもなければ、新しいヒューマニズムに目覚めた市民たちの共同体でもない、明日をも知れぬ運命の待つ戦場である。トーマス・マンは作中でロマン主義批判をおこないつつも、戦場に赴く若い兵士というやはりロマン主義的な解決でしかハンス・カストルプを帰還させることができない。『魔の山』においては、ロマン主義的な死への親近感が完全には克服されていないのである⁶⁹。

これは現実の市民社会のどこにも、ハンス・カストルプのヒューマニズムが実現される場所が存在していないという問題を明らかにしている。

III. 『魔の山』、その可能性と限界

トーマス・マンは、『魔の山』で「個人的な苦悩の世界から脱して、新しい社会的な人間的な道徳性の世界へと出ていく道」⁷⁰を踏み出した。それは、彼自身が「世界の片隅」⁷¹とよんだ、そしてふかく親しんでいた北ドイツの市民の世界から離れて、ヨーロッパを全体的に捉えようという試みであった。そしてこのヨーロッパの縮図たるサナトリウム・ベルクホーフで、主人公ハンス・カストルプは「昇華」をとげ、「人間の理念」⁷²と結びついた新しいヒューマニズムを得た市民として生まれ変わるのだが、この「昇華の物語」⁷³は、幾重にも人工的に造りあげられた、そして日常から隔離された錬金術の世界ではじめて可能と

なるものだった。

そのために「ヨーロッパ的な作品であろうとする野心を持つこの作品」⁷⁴はそれまでの彼の他の作品と異なり、自伝的要素が大幅に後退しており、「個人的なもの」である「私」から離れようという意図を持っていた。

『魔の山』の市民たるハンス・カストルプの実態は、『ブッデンブローク家の人々』の中で具体的に描写されていた市民たちとは違うものになっていたが、これはトーマス・マンがなじんでいた、彼の生まれ育った世界の市民たちともかけ離れたものとなっていたのである。

ハンス・カストルプが、「市民的生活規範の知的瓦解」⁷⁵後のヨーロッパで、新しい行動原則としてのヒューマンイズムを獲得するためには、「市民」の理念が必要だった。「市民」の理念は、北ドイツという地域性から脱出し、商人という特定の階級からの脱却が必要だった。しかしそれは、活動の具体的なモデルの消失であり、日常生活を行なうための基盤を失うことでもあった。

トーマス・マンは、「中間の理念」や「ヒューマンイズム」という概念を持ち込むことによって、「市民」の理論化を試みている⁷⁶。しかしそれは不安定で概念的にも不明確なものにとどまっていた⁷⁷。

しかしそうした理論化に頼らずともトーマス・マンにとっては「市民」とは概念ではなく、自分の父祖たちを通して得た現実でもあった。それを彼は自明のものとして無意識に手に入れていたのである。

なぜなら私は、ほとんど意識とさえなつた一つの本能から、私がついて生まれた市民社会の伝統にしがみついていたからです。[下線部筆者]

ひそかな模範として私の行動を規定しているのは、やはりもともと亡くなった私の父の人格なのである。⁷⁸

トーマス・マンがついて生まれた市民社会の伝統は個人と日常に強く結びついたものだった。

したがって市民性、それも家父長制的な貴族主義的な、生活気分、生活感情としての市民性は私の個人的な相続財産なのだ。[下線部筆者]⁷⁹

トーマス・マンが受け継いだ最大の財産は、はやくから経済的自立を可能にした莫大な資産ではなく、父祖たちの生活を通して身体の奥深くまで浸透していた「市民性」だったの

『魔の山』の市民

である。この体験としての「市民性」を彼は生涯見失うことはなかったという⁸⁰。

ハンス・カストルプには、このような体験としての「市民性」は受け継がれていない。彼は両親の記憶はほとんど持たず、祖父とも観念的にしか結びついてはいないからである。活動する商人たち市民の姿は彼の周りにはみられない。彼は垂直にも、水平にも本来の市民の姿とは結びついていないのである。

彼が受け継いだのは市民的な生活様式だが、「テーブルマナーや会話、称号や上品な作法、衣装や（現在は習慣から脱落してしまった）帽子など」⁸¹で特徴付けられるものであるが、こうした生活様式は彼にとって本来の目的や意義を離れて、内容を伴わない単なる形式と化してしまっている。したがって変化に対する柔軟さを持ち得ず、危機に対して抵抗力を持たない、その結果意味を容易に見失ってしまうものである。これは、日々の活動によって鍛えられたたくましさや備えた本来の市民のもつ美徳からの大幅な後退である。

さらに『市民性』は、自らの近代化能力と社会的模範的影響力に根拠をもった、進歩の確信という形であらわれている⁸²ように 本来市民というのは、勤勉さに根拠を持つ「財産と教養」によってみずからの権利を獲得してきた人々であり、その意識において進歩的、革新的な人々のことでもあった。

トーマス・マンは、市民の持つ、あるいはかつて持っていた、なによりも強く自由と平等を求める進歩性、革新性を十分に理解していた⁸³。したがって、『ブッデンブローク家の人々』に登場する市民たちはこの進歩性を持ちあわせている。ヨハン・ブッデンブロークは郵便制度の改善に積極的に取り組み、その息子のコンズルは鉄道を推進し、ガス灯の導入に満足をおぼえている人物である、そして関税同盟への加入も主張している⁸⁴。

それに対して『魔の山』では、すべてが単なる形式主義、頑固な保守主義となってしまう。その精神性は失われ、単に生活のスタイルとして残っているに過ぎない。自らが市民であるという自覚は、特定の生活様式を守ることによって保たれているにすぎない。そしてその生活様式も脆弱なものでしかない。

その拠って立つ基盤を自覚している限り、市民とは革新性をもつ進歩的なものでありえたのである。その市民の遺産を受け継いでいたトーマス・マンは、そのことをきちんと自覚していた。

そしてかつての彼の知る市民たちをそのモデルとして、リューベックの市民たちの世界に固執しながらも、『ブッデンブローク家の人々』は世界の財産となり得た。彼は言う、「最も個人的なものを示して国民的なものを言い当てた（… [省略筆者]）最も国民的なものを示して普遍的な人間的なものを言い当てた」⁸⁵と。

トーマス・マンは、『ブッデンブローク家の人々』で「いわば偶然に、無意識とも見える

形で示したもの」⁸⁶を、『魔の山』で意識的に捜し求めなければならなかった。そしてそれはなお途上であった。ここでは自伝的要素の後退が、受け継がれるべき市民の伝統の消失としてあらわれている。トーマス・マンが『魔の山』で示した新しいヒューマニズムは、その精神的な価値において新たな高みを獲得したが、その一方で『ブッデンブローク家の人々』に比べて生活に根ざした現実感覚という点で後退を示したものである。

トーマス・マンが他の多くのドイツの作家たちと異なり、息の長い作家活動を続けることができたのは、まさに市民性に根ざした地に足のついた現実的態度のゆえであり、この現実感覚は彼の作品の大きな特徴でもある。つまり『魔の山』の観念性は長所でもあるが、また同時にトーマス・マンの作品にとって重大な欠点ともなり得るものである。

その欠点を補うための新しい「市民」の理論化は、『市民時代の代表者としてのゲーテ』(1932)などの一連のゲーテ・エッセイまで時を待たねばならない。ゲーテはその巧みな現実感覚ゆえに俗物と揶揄されることが多いが、この現実感覚こそが他の多くのドイツ作家に欠けているものである。健全な現実感覚を持った作家であるという点でトーマス・マンとゲーテは共通している。

トーマス・マンが試みた「市民」理論化の試み、市民を求める過程は、じつは彼にとっては、無自覚ではあってもかつて持っていたものを再発見することであったのである。

注

- 1 Mann, Thomas: Gesammelte Werke in 13 Bd. Frankfurt a.M.(FTB) 1990. [以下本文、中ともGW.と略記する]を定本とした。なお本文中に引用している訳文は、『魔の山』については関泰祐・望月市恵訳(岩波文庫)、『ブッデンブローク家の人々』については望月市恵訳(岩波文庫)を、その他については新潮社版全集の訳文を参照の上、必要な場合には表現を改めた。
- 2 Mehring, Reinhard: Thomas Manns »Traumgedicht vom Menschen«. In: Neue Rundschau, Jg. 112, H. 3, Frankfurt a.M. 2001, S. 22.
- 3 Bürgin, Hans / Mayer, Hans-Otto (zusammengestellt): Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens, Frankfurt am Main(FTB) 1974, S. 75.
- 4 GW. XIII, S. 155.
- 5 GW. XIII, S. 151.
- 6 Mann, Thomas u. Heinrich: Briefwechsel. 1900–1949, Frankfurt am Main 1984, S. 128.
- 7 GW. XIII, S. 152.
- 8 Kurzke, Hermann: Thomas Mann. Das Leben als Kunstwerk, München 1999, S. 328f.
- 9 Wysling, Hans(Hrsg.): Thomas Mann. Selbstkommentare: »Der Zauberberg«, Frankfurt a.M. 1993, S. 12f.
- 10 GW. XII, S. 9.
- 11 Reed, Terence J.: „Der Zauberberg“ Zeitwandel und Bedeutungswandel 1912–1924. In: Stationen der Thomas-Mann-Forschung, Würzburg 1985, S. 123.
- 12 Mann, Thomas: Briefe 1889–1936, Frankfurt a.M. 1961, S. 208.
- 13 GW. XIII, S. 147.

『魔の山』の市民

- 14 GW. XI, S. 602.
- 15 Kurzke, Hermann: Thomas Mann. Epoche-Werk-Wirkung. München ²1991, S. 197.
- 16 森川俊夫：『魔の山』について，一橋論叢第67巻第4号，1972，108ページ
- 17 Wysling, Hans: Der Zauberberg. In: Thomas-Mann-Handbuch. Stuttgart 1990, S. 403.
- 18 GW. XIII, S. 157.
- 19 GW. III, S. 54.
- 20 GW. III, S. 32.
- 21 GW. III, S. 38.
- 22 GW. III, S. 40.
- 23 GW. III, S. 41.
- 24 Wysling, Hans: Der Zauberberg, a.a.O., S. 402.
- 25 GW. I, S. 77.
- 26 GW. I, S. 76.
- 27 「目先を変えるための口実に，彼はハンブルク生まれになっています」（GW. XI, S. 393.）とトーマス・マンは説明しているが，二人の違いは本質的なものであり，彼の発言通りではありえない。
- 28 GW. I, S. 13.
- 29 拙稿，『ブッデンプローク家の人々』における「風景の間」—市民文化を象徴する空間—，[日本独文学会東海支部 ドイツ文学研究 第30号1988] 参照。
- 30 GW. III, S. 33.
- 31 GW. III, S. 45f.
- 32 GW. I, S. 695.
- 33 GW. III, S. 46f.
- 34 GW. III, S. 48.
- 35 GW. III, S. 52.
- 36 GW. III, S. 275f.
- 37 「たしかに市民的な生活態度は，主にことのほか理想的な家族像によって特徴付けられた」Kocka, Jürgen: Bürgertum und bürgerliche Gesellschaft im 19. Jahrhundert. in: Bürgertum im 19. Jahrhundert. Bd.1, München 1988, S. 21.
- 38 Wysling, Hans: Der Zauberberg, a.a.O., S. 401.
- 39 GW. III, S. 277.
- 40 GW. I, S. 377.
- 41 GW. III, S. 48.
- 42 GW. III, S. 277.
- 43 GW. III, S. 278.
- 44 Kocka, Jürgen: Bürger und Bürgerlichkeit im 19. Jahrhundert, Göttingen 1987, S. 18.
- 45 GW. III, S. 286.
- 46 GW. III, S. 339.
- 47 GW. III, S. 201.
- 48 GW. III, S. 592.
- 49 GW. III, S. 593.
- 50 GW. III, S. 594.
- 51 GW. III, S. 596.
- 52 GW. III, S. 599.
- 53 GW. III, S. 608.
- 54 GW. III, S. 678f.

- 55 GW. I, S. 12.
56 拙稿, 前掲論文, 64 ページ以降参照。
57 GW. III, S. 684.
58 GW. III, S. 683.
59 GW. III, S. 685.
60 GW. XI, S. 396.
61 GW. III, S. 823.
62 GW. III, S. 827. /すでに 1901 年トーマス・マンがハインリヒに宛てた手紙の中にほぼ同じ内容の記述
を見ることができる。「文学がぼくに教えてくれる最後のそして最善のことは、死というものを、その反
対物である生へ到達するためのひとつの可能性として捉えることです。」*Brief an Heinrich Mann*, 13. 2.
1901. Mann, Thomas u. Heinrich: *Briefwechsel 1900–1949*, a.a.O., S. 19.
63 GW. III, S. 984.
64 GW. III, S. 983f.
65 GW. III, S. 984.
66 ebda.
67 GW. III, S. 985.
68 GW. III, S. 988.
69 Wisskirchen, Hans: *Zeitgeschichte im Roman. Zu Thomas Manns *Zauberberg* und *Doktor Faustus**.
(Thomas-Mann-Studien VI), Bern 1986, S. 102. u. Anmerkung 44.
70 GW. XIII, S. 152.
71 GW. XI, S. 1129.
72 GW. XIII, S. 159.
73 GW. XIII, S. 157.
74 GW. XI, S. 595.
75 GW. XI, S. 304.
76 Koopmann, Helmut: *Thomas Manns Bürgerlichkeit*. In: *Thomas Mann 1875–1975. Vorträge in*
München-Zürich-Lübeck, Frankfurt a.M. 1977, S. 49.
77 Kurzke, Hermann: *Thomas Mann. Epoche-Werk-Wirkung*, a.a.O., S. 51.
78 GW. XI, S. 311. u. 386.
79 GW. XII, S. 139.
80 Ulrich, Berud: *In spaßiger Hoffnungslosigkeit. Thomas Mann und das bundesrepublikanische Bürgertum*. In:
Neue Rundschau, a.a.O., S. 114.
81 Kocka, Jürgen: *Bürgertum und bürgerliche Gesellschaft im 19. Jahrhundert*, a.a.O., S. 28.
82 Kaschuba, Wolfgang: *Deutsche Bürgerlichkeit nach 1800. Kultur als symbolische Praxis*. in: *Bürgertum im*
19. Jahrhundert. Band 3. München 1988, S. 39.
83 Lehnert, Herbert: *Thomas Mann und die Bestimmung des Bürgers*. In: *Thomas Mann 1875–1975*, a.a.O., S. 656.
84 Vgl. GW. I, S. 359ff.
85 GW. XI, S. 385.
86 ebda.